

岩井眞實
編
鳥越文藏

上方雜書

九

古典文庫

岩井眞實 編
鳥越文蔵

上方雜言本

九

古典文庫

平成八年三月二十日印刷発行 非売品

編者 岩井眞實

発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

製本者 共伸舎

本言狂方上
九

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座東京〇〇一九〇九一四五九七番

目次

凡例	三
一、けいせい安要世界	五
二、女座禅紫雲石	五
三、大飭福寿草庭	一〇七
四、稻荷長者代継丸	一四九
五、福引巳午大竈	二〇一
六、けいせい宝の山崎通	二四九
解説	二九五

凡例

一、『上方狂言本』の第九冊目として、国立国会図書館蔵の「けいせい安要世界」、東京芸術大学附属図書館蔵の「女座禅紫雲石」、「大飭福寿草庭」、「稻荷長者代継丸」、「福引己午大竈」、東京大学附属図書館蔵の「けいせい宝の山崎通」の六篇を収めた。

一、翻刻の基準は第一冊目以来のものを原則とした。

(一) 文字は通行の字体を採用した。

(二) 句読点はそのまゝを用い、通読の便を図ってそれに該当する所を一字空きとした。

(三) 破損等で判読不能の文字は□または「」をあて、推定できる場合は傍記した。

(四) 挿絵は見開き右上から左下にかけて第一図、第二図と数えることとした。

(五) 挿絵中の文字は、底本に□で包んだ部分は「」で、それ以外は「」

で示した。

(六) 丁及び行の移りは底本には従わなかった。丁の移りには丁付を付記した。

(七) 通読の便を図って、登場人物の会話等には「」を付し、人物の登退場などによって適宜改行した。場面転換は一行空きによって示した。

(八) 底本の清濁、誤字、誤刻、衍字などは一切補訂せずに、原況通り翻字した。ただし、紛らわしいものには（ママ）を傍記した。

一、解説は書誌的なことに限り、その他はできるだけ簡単にした。

一、本書の刊行について、原本の披見と翻刻を許可された、国立国会図書館、東京芸術大学附属図書館、東京大学附属図書館に感謝の意を表する。

けいせい安要世界

国立国会図書館蔵

三月三日より

(絵)

本出し申候(見返・上段)

第一ノ巻

傾城の間夫狂ひ芸子の悪所通ひ

付り 私が勤は明日やめふ共大尽の力次第

第二ノ巻

心中にうき名のながれ川白人骨を碎く

付り 弱男は腰につける巾着宿の寝物語

第三ノ巻

揚屋の間鍋龍門の瀧のぼり詰た淀鯉

付り 宝は身の指合せ時の間にあふ金の鶏

并ニ 吉原雀中に覚た東の粹鑑

風流醜姁三味線 全部六巻

付り 野傾の両道好た方をひいたり猪腕

第四ノ巻

重手代異見の強弓矢種のつきる身軀

付リ 我物ながらまゝならぬ金銀さりとは此世の物思ひ

第五ノ巻

恋の大あきんど色の買置キ 七所世帯

付リ 情の掛あきなひ芸子に縁をむすびの紙見せ

第六ノ巻

色に打こむ手管がるた下ぬきをくふ浮気男

付リ 風呂屋の猿にふきあげられた南風（見返・下段）

并ニ 見るめかぐはなはめいどの粹諸分の見通シ
戌の年 役者内証鑑
大評判 やくしやないせうかごみ

付リ 室咲の Neubou 雪の中の花代々の情知リ

第一 有大尽酒の上のぬれ事

付リ 帽子なしの素顔打とけての料理ごのみ

第二 無大尽腕なしの六法

付り ぶたいゐるしやう中込のある心中

第三 小気大尽物前の実事

付り 顔見せの花うるほふて来る約束

右三卷 三ヶの津新評判 追付本出申候（三オ・上段左）

上 ぼんのうの坂 付 立君のにはひあぶら

中 とんよくの峠 付 新ぞうのつやおしろい

下 ぼたいの堤 付 ぼさつのひかりべに

此度 万太夫 二の替り大あたり それゆへ二卷の上本にせりふ残らず入 おつ付出し申候（三オ・上段右）

一 こだいぶ殿おく

若井久四郎

一 よめおかつ

きり波たきゑ

一 こしもとせきのと

おのへ定之介

一同 村上初次郎

一同 浅田かほる

一 大仏げき太夫

実悪 藤川武左衛門

一 中げんだん介

山本光右衛門

一同 おく内

浅田善右衛門

一 おの崎彦太郎

坂東又十郎

一 さい将殿娘なつ姫

若女 瀧井半之助

一 いもとおたか

おか山さよの介

一 こしもとおうの

福岡弥五四郎

一 同 花川作弥
お梅

一 同 竹中吉十郎
おちく

一 同 山本春之丞
お長

一 同 よし沢権十郎
おやな

一 あげや孫太郎

若林四郎右衛門

一 女郎や四郎兵へ

藤田九八郎

一 けいせい花さき

太夫 富沢千代之助（三オ・中段）

一 けいせい小太夫

太夫 山本かもん

一 かぶろ市之丞

きり波おとの介

一 けいせいことうら

霧波たみの助

一 けいせいはぎの

山本まつえ

一 かぶろ大吉

川村林之丞

一 かぶろ吉弥

中村さもん

一 ぜんどうじおしやう

松川六郎左衛門

一同 ちごくはんおん丸

つゝゐ万次郎

一同 おのへ平次郎

一同 山本小いづゝ

一 松崎屋升左衛門

立役 坂田藤十郎

一同 代判 藤三郎

立役 山下京右衛門

一同 手代 喜兵へ

敵役 三笠城右衛門

一 紙屋平四郎

若衆 おの川宇源次

一 女房おいわ

若女 鈴木辰三郎

一 はゝおや

玉川千之丞

一 紙うり久七

だうけ かねこ吉左衛門

以上

(三才・下段)

第一

けいせい安あん要よう世せ界かい

松崎屋升左衛門
同代判藤三郎

うき名の二枚手にまいてがた形

ゑちこの国ぜんだうしのおしやうは・どうじゆく共に　じやうとうみやうの・かなどうろうをかゝせ・国中をすゝめて通り給へば・かづききたる女中三人やうすを聞・「扱は　此度都へかい帳に上らせ給ふ・ぜんだう大師様のじやうとうみやうでござんすか・私らは此お国のいなぶねこだいぶ様のよめ君・なつ姫様につかはれます・こし共でござんす・なつ姫様と申は　都梅津さい将様のお姫子様・それゆへ我々も都の者・おつつけ」京へ「歸りまして・御かい帳のじぶんは京でおめにかゝりませふ・おみかげをいたゞかして下さんせ・」おゝ　持合てゐまする」と・一々けちゑんあれば・「忝なうござんす」と・両方へ

わかれ行給ふ。

いなぶねこだいぶ殿のからう。大仏げき大夫は。侍共を召ぐし 御門
前に来る所に。内さはがしく 中げんのだん介 おく内。こうろんし

だん介はむかふきずをおい。おく内もろ共立出

せりふさまぐ
皆上本ニ有 げき

大夫聞。「扱は辻君惣嫁ゆへのこうろんか。其女を是へ出せ」と有ば。

惣嫁は くろいぬのこに白ゑりかけ 立出る。げき大夫みて「扱もよ
いきりやうかな。国の守のおぜん様といふてもくるしうない。とても
かやうな身とならば。お江戸のよし原か京の嶋原新町へも出。けいせ
いになれば。かね持のはらふくれ共がうけ出し。小袖の中から目を見
出してゐよふに。あさましいそうかに成は。心のあしい所が有ゆへじ
や」といへば。女聞「是 しらがさん。初たいめんから きつうおろ